

生薬ニュース

近畿大学東洋医学研究所附属診療所調剤室

今月のピックアップ

おうれん
黄連



オウレンとは・・・

オウレン（黄連）とは、キンポウゲ科の植物の根をほとんどのぞいた根茎（こんけい：地下茎の一種）を指します。日本起源のものを *Coptis japonica* といい、ほかの *Coptis deltoidea*、*Coptis teeta* も合わせて生薬として使用されています。

直径1 cm、長さが2-4 cmでひも状または連珠状で、切断面は深い黄色を呈しており、味は極めて苦く、噛むと唾液を黄色に染めるようなものが質の良い生薬といわれています。



オウレンの作用

オウレンの主な作用は、健胃作用、止瀉作用、抗炎症作用、抗菌作用など多岐にわたりますが、その大きな役割を果たすのが、主成分の一つ“**ベルベリン**”で、その含有率は3-7%と多いことで知られています。生薬の薬能としては、前回の黄芩（オウゴン）と同様、清熱燥湿と表現されます。また性味（せいみ）も『苦・寒』と表現され、これも黄芩と同じです。

ご興味のある方は是非生薬ニュース第2号（黄芩）もご覧ください。

しゃざい 瀉剤のオウレン

『瀉心湯類』と呼ばれる方剤群があります。「瀉心」とは「心」の熱を取り除く、心窩部（しんかぶ：みぞおちのあたり）のつかえなどの症状に処方される漢方薬です。この瀉心湯に多く配合されているのが、今回取り上げたオウレン（黄連）と前回取り上げたオウゴン（黄芩）です。生薬の分野では、オウレンは「下焦（かしょう）」の症状：嘔吐・腹痛・下痢、オウゴンは「上焦（じょうしょう）」の症状：のぼせ・精神不安・不眠・鼻血に効果があると考えられ、同時に服用することで相乗効果を示し、全身の熱をとる清熱作用を示します。

オウレン栽培の今昔

ここでは、オウレンの日本国内における栽培の変化と市場価格の変化についてお話ししたいと思います。

かつては、加賀黄連、越前黄連、丹波黄連、因州黄連など、各地域で黄連が栽培されており、その品質には定評がありました。生薬の中でも高価な品目であったため、杉林の下の草として黄連を栽培しそれを適時（4-5年に1回）収穫することで、主に山林を所有する農家にとってはよい臨時収入となっていました。価格も1980年代は和産オウレンとして

1万円/500gくらいで取引されてきました。しかし、90年代になると中国産のオウレンの品質がよくなり、しかも安価であったため、中国からの輸入品が日本の生薬市場に参入してきました。そのため、和産オウレンの価格が半額以下となってしまう、収益が上がらないため栽培農家がみるみる減少し、今では数軒を残すのみとなりました。

現在、和産オウレンは、上記の理由により非常に貴重な生薬の1つとなっており、再び市場での価格は上昇しています。当診療所調

剤室でも以前は和産オウレンを使用していましたが、この間の価格上昇により薬代の負担が急激に大きくなるよう、中国産の良質なオウレンを採用するようになりました。和産オウレンもご希望があれば処方できますが、価格は4倍となり（薬全体の価格が4倍になるわけではありません）、高価な生薬の1つとなっています。下の写真で日本産と中国産のオウレンを対比しています。色調の違いに気づきましたか？これは、オウレンの主要成分であるベルベリンの含有量の違い（中国>日本）によるものようです。

オウレンと柴胡のちがい？

右のリストに記載されている『半夏瀉心湯』は、黄芩、黄連、甘草、人參、大棗、半夏、乾姜の7種の生薬で構成されています。効能は前述している通り、みぞおちのつかえ、悪心嘔吐、消化不良、食欲不振などの胃部症状に処方されることが多いと思います。この7種のうちの1つ、黄連を柴胡に変更すると、前号で取り上げました『小柴胡湯』となり、その効能は感冒、慢性肝炎となります。構成生薬、その含有量のわずかな違いがこれほど効能に影響を与える、漢方の興味深い点の1つだと思います。

オウレンを含む方剤：

いれいとう おうれんとう おうれんげどくとう
 胃苓湯 黄連湯 黄連解毒湯

さんおうしゃしんとう はんげしゃしんとう
 三黄瀉心湯 半夏瀉心湯

しょうきょうしゃしんとう かんぞうしゃしんとう
 生姜瀉心湯 甘草瀉心湯

せいじょうぼうふうとう によしんさん
 清上防風湯 女神散



中国産

日本産